

## 「校歌等に歌われた上田城と真田幸村」(NO2)

関口貞雄(48期、関西同窓会)

### (5) 校歌

大正13年(1924)2月校歌が作られて発表会が行われ、3月の卒業式に歌われた。

(作詞 上田中学国漢科 作曲 岡野貞一)

歌詞に文武両道を歌い上げたかったが、文または産業界に適当な人物が見当たらず、武の真田幸村讃歌となったようである。赤松小三郎は今日程高く評価されておらず、山極勝三郎は現役の東大教授であったし、三吉米熊は他校(小県蚕業学校、上田蚕糸専門学校)の創立者で、上田中学校歌には不向きであったと思われる。

- 1 秋玲瓏の空衝きて      ゆうべ太郎の嶺高し  
    春縹渺の末けむる      あした千曲の水長し
- 3 古城の門をいで入りて      不動の心山に見る  
    我に至高の望あり      挙世の浮華に迷はむや
- 4 たふとき霊血に承けて      不断の訓川に汲む  
    我に至剛の誇あり      いざ百難に試みむ



上田松尾高校校門  
(火事後の再建校舎)



雪の校門内側

### (6) 学友会歌

大正10年(1921)4月学友区の規定が設けられ、各地区に16学友会が結成された。上記のように大正13年(1924)校歌が制定されると、各学友会にも会歌が作られた。

- 6-1 尚志会歌(上田市内、10部会)大正14年(1925)作成
  - 1 烏帽子ヶ丘の横雲を      破る朝日子影さして  
    我が人生の黎明期      松尾が丘にうつろえば  
    ああ揺籃の学び舎の      剛毅の姿を学べよ健児

- 2 時運かなり節を負い 難波に咲くや山桜  
 その英雄の侠骨の おもかげ偲ぶ高殿に  
 正義の御旗うち立てて 剛毅の姿を学べよ健児

この他に各部会は独自の会歌を作っていた。(五部会剛毅節 七部会剛毅節 等)

- 6-2 川西同志会歌 (丸子電鉄別所線通学生、別所、青木、室賀、浦里、富士山、  
 東塩田、中塩田、西塩田、上田原、下之郷等)

- 1 信濃の空の明星と 玲瓏の玉の心持て  
 猛き有為の益良夫が 立てたる誇り栄えの会  
 2 浅間の山のもうもうと 千曲の流れとうとうと  
 学びの園の庭広く 信州健児の意気高し

川西同志会は明治 38 年 (1905) 2 月に結成され、学友会の嚆矢となった。

- 6-3 立命会の歌 (小諸、軽井沢等の上り汽車通学生)

- 1 栄華の文化世にうつり 人その夢にさめがたき  
 まよいの闇をうちやぶり 若き血潮のたかなりて  
 吾国の旗を護らんと 信濃の空にわれ立ちぬ  
 2 春桜の雲間より 浅間の峰を仰ぐ時  
 胸に希望の火は燃えて 勇躍の思い堪え難き  
 立命の意気を示さんと 集いし猛人幾百人

今年亡くなった作詞家の永六輔さんは東京浅草のお寺で生まれ育ち、昭和 20 年 (1945) 4 月中学入学と同時に小諸市へ疎開し、上田中学へ編入となって (49 期) 立命会へ入会した。戦時中のことなので、各学友会には軍隊組織を真似て「気合を入れる」と称して鉄拳制裁等の暴力行為が横行していた。中でも立命会は悪名高く、5 年生、4 年生が勤労働員で留守の間に、1 年生の永さんは 3 年生、2 年生に理由もなく何回も殴られたと云う。8 月に終戦となり、永さんは間もなく帰京したが、後年新聞記者となった同級生が永さんにインタビューした時、「上田中学と小諸市には良い思い出は一つもありません。」と素気なく答えた。事実、上田高校同窓会からの寄付の要請には全く応ずることはなく、学校からの講演依頼も断つたらしい。この頑なな姿勢も晩年には少し軟化し、10 年程前に初めて先輩として母校で講演を行ったと伝えられる。

その他にも抱雲会 (丸子電鉄丸子線通学生) 等があった。

## (7) 運動部の歌と応援歌

学校創立以来活発に活動してきた各運動部にも部歌が作られた。

### 7-1 柔道部歌

- 1 東浅間の山遠く 一風秋をもたらして  
真田の丘の丘の上に 紅葉燦と輝けば  
紅の血は高鳴りて 八百の胸たぎり行く
- 3 信山の秋更け行けば 松尾城下の関の声  
壮士白衣の肌寒く 城頭松に声ありて  
鉄腕を撫す益良夫が 首途の曲ぞ胸に沁む

上田中学に名物柔道教師依田誠先生がいた。堂々たる体軀から、ついたあだ名が“タネ”（種馬）で、上中数え歌の一番に登場する。

- 1 人も知ったる上中に 六尺豊かなタネがいる

依田先生は早大柔道部出身で、石黒敬七7段（NHK ラジオ番組“話の泉”等に出演）と共に黄金時代を築いた名選手で、正課だった柔道の授業の終わりに、必ずこの柔道部歌を朗々と歌われたことが懐かしく思い出される。

### 7-2 上中野球部の歌

吾が上中の野球部よ 汝が日頃鍛えたる  
北信健児の意気と技 見せるは今ぞ振れや振れ  
敵はいかに強くとも 日頃鍛えし鉄腕と  
獅子奮迅の勇を鼓し 破れやほうれ敵塁を  
ふるえやふるえ上中よ 勲を樹てて帰る時  
松尾の城もかがやかん 上中校旗も馨るらん

### 7-3 応援歌 No. 1 （作詞 小川榮一）

- 1 千曲の流れ絶間なく 浅間の煙つきやらず  
栄えある歴史残しつつ 星霜ここに六十の
- 2 松尾城頭学舎に 歓喜の声のみちみちて  
おどる血潮湧きたちぬ ふるえやふるえ我が選手  
ラ上田ラ上田上田上田フレ

7-4 応援歌 No.2 (作詞 小川榮一)

- 1 松尾城頭青嵐 昇る朝日の烏帽子山  
おどる千曲の激流は 上田軍の意気と知れ
- 2 清き歴史の我が健児 雪のあしたに霜の野に  
鍛えし腕今ぞいま 力にうなる晴れ戦  
ラ上田ラ上田上田上田フレ

(8) 上田中学校報国団団歌 (作詞 十亀豊一郎 作曲 影山雄)

自由で伸びやかな大正時代から昭和時代に移ると、昭和恐慌が押し寄せ、血生臭い 5.15 事件、2.26 事件等が勃発し、やがて軍部の主導による満州事変、日中戦争、日米開戦へと突き進み暗黒の時代を迎えた。第2次世界大戦開戦の直前の昭和16年(1940)4月、文部省の指示で学友会組織も改組となり、報国団が結成されて団歌が作られた。

- 1 人生意気に感じては 一剣寒し千曲川  
義に殉じては烈々の 赤心旗幟の色に染む  
松尾ヶ丘の松籟に 凜冽の声聞かんと  
秋玲瓏の空衝きて 謳え健児等その節義
- 2 悠久の時流れては 叡智を宿す蒼穹の色  
清明の気の凝る処 青史に名ありその鬼策  
北辰太郎に仰ぎ見て 黙示の色を読まんとき  
関八州も震えたり 学べ健児等その智略

昭和10年(1935)5月25日は楠木正成が「湊川の戦」戦死して600年に当たり、神戸の湊川神社では「大楠公六百年祭」が大々的に挙行され、昭和15年(1940)には「紀元二千六百年祭」が国を挙げて祝われた。

作詞者十亀先豊一郎は歴史の先生で、後醍醐天皇に対して忠義心の厚い楠木正成をイメージしながら、豊臣家に対する真田幸村の報恩と義を重ね合わせ、報国心を鼓舞したものと考えられる。現在の視点からもなかなか秀れた真田幸村讃歌の歌詞である。

(以下、NO3へ)